様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２６５２

研究課題名（和文）動詞の多義性と文法化の理論的記述・分析－命題的意味、非命題的意味、視点的意味－

研究課題名（英文）Theoretical description and analysis of polysemy and grammaticalization in verbs: propositional meaning, non-proposisional meaning, and view point

研究代表者
日高　俊夫（HIDAKA, Toshio）

武庫川女子大学・教育学部・教授

研究者番号：５０７３７５２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：開始付近を表す「V-始める」「V-かける」「V-だす」「V-てくる」、終了付近を表す「V-切る」「V-ぬく」について、命題的意味や視点的意味、非命題的意味およびそれらの関連性を踏まえたを意味構造を分析・記述し、その上で統語構造との関連性についても議論した。また、近年意味用法が変化していると思われる「普通に」についても命題的意味と非命題的意味を軸に考察し、動詞の文法化と同様の変化を示しているという示唆を得た。英語については、所有を表すhave gotとgiveを主動詞とする軽動詞構文を分析し、非命題的意味である発話行為的意味が重要な役割を果たしているとの分析結果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
語彙意味論では、動詞の真理条件的意味を記述するLCS（語彙概念構造)を用いて同値類を括り出し、動詞の意味と統語構造との関係が議論されてきた。また、Pustejovsky（1995）以降は、いわゆる百科事典的知識とされる非真理条件的意味も一部語の特質構造に属する意味要素として取り入れ、レキシコンと語用論とのインターフェイスを理論的に扱うことが可能になったが、これらの意味のレキシコン理論内での扱いについて未だ共通見解はない。本研究はレキシコンにおける真理条件的意味と非真理条件的意味の位置付けとその関係性を論じたという意味で、その課題解決を目指すための解答例を示したものと位置付けられる。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the semantic structure of the following (subsidiary) verbs focusing on their propositional meaning, non-propositional meaning, and their interrelationship: `V-hazime(ru)', `V-kake(ru)', `V-das(u)', and `V-tek(uru)'. It also discusses the relation between their semantics and syntactic structures. The propositional and non-propositional meanings of `hutuu-ni', the meaning and usage of which seems to have changed in recent years, is also discussed, and it is suggested that it shows the similar changes as the grammaticalization of verbs. As for English, we analyze `have got', which means possession and light verb constructions featuring `give' as the main verb, and find that their speech act meaning, non-propositional meaning, plays an important role.

研究分野：語彙意味論、統語論、語用論

キーワード：レキシコン　語彙概念構造（LCS）　特質構造　百科事典的知識　命題的意味　非命題的意味　推意　視点

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究が対象とする、非命題的意味および視点的意味が関わると考えられる複合動詞・複雑述語の記述的分析については、森田 (1968, 1994)、今仁 (1990)、吉川 (1976)、寺村 (1984)、吉田 (2012)等多くの研究が挙げられるが、必ずしも構成性の原理が厳密に守られていないという問題点もあるように思われる。構成性の原理を重視した形式的・理論的分析としては、特質構造 (Qualia Structure; Pustejovsky 1995)を用いた中谷 (2008)および Nakatani (2013)等があるが、少数の分析に留まる。本研究も基本的に中谷と同様の立場を採る。

日高・新井 (2012)では中谷 (2008)を批判的に検討し、Hidaka (2011)で提案した、特質構造の中身を「命題的意味」(Truth-conditional Section)と「非命題的意味」(Non-truth-conditional Section)に分割した意味表示を用いて「V テイク」の多義性を記述・分析することにより、中谷では説明の難しい現象について一定の説明を与えた。また、新井・日高 (2015a)では、「V ユク」の現代日本語における統語構造と意味構造を分析し、新井・日高 (2015b)では「行く」「来る」の文法化における意味変化を形式的に記述した。Bando and Hidaka (2015a, b)では「プロペラが回りかける」等の「V かけ」について、出来事の開始直前と直後の解釈の曖昧性が生じるしくみを「初回最短承認時点（Minimal Approved Point）」という概念を用いて説明した。また、通時的分析としては、小島 (1998)の『源氏物語』の「V(て)行く」の分析を踏まえ、Arai and Hidaka (2013)で「行く」の歴史的文法化過程を議論し、形式化した。

以上のような先行研究の知見を批判的に検討した上でさらに現象を観察・分析し、理論的形式化を行うことにより、構成性の原理をより厳密に実現し、反証可能性の高い理論的分析が可能になると考えられる。

２．研究の目的

本研究においては、「文法化」を、動詞がもともと表す意味が希薄化し、補助動詞的に用いられてアスペクト的、モダリティ的意味を表すようになることと定義し、その共時的・通時的プロセスの解明および理論的形式化を行う（共時的視点からは動詞の多義性あるいは多義的用法として分析されると考えられる）。

分析対象としては、複合動詞とテ形複雑述語を取り上げ、理論装置として、上述の Hidaka (2011)の意味表示を用い、「行く」「来る」等の「視点」を持つ動詞や、「かける」や「しまう」等のイベントの始点や終点に注目する（補助）動詞の意味を整理して記述・分析することを通して、動詞の意味の多義性と文法化の関係を理論的に明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1) 共時的な観点から動詞の意味構造と文法化の関係を記述・分析する。

これまでの分析の妥当性を検証し、特に、意味構造における多義性と、それに付随する統語構造について、Hidaka (2011)等の意味表示を用いて構成的に記述・分析する。

(2) 文法化における歴史的変遷過程を探る

まず、日高 (2015)で主張した「来る」の文法化プロセスの妥当性を検証する。日高(2015)では、「V(て)来(る)」のアスペクト用法の歴史的出現に注目し、そこにはアスペクト用法が存在しないことを確認し、近世にも同用法が見られなかったため、それ以降の作品を検証し、明治になって「V て来る」がアスペクトを表すようになったと結論づけた。しかし、検証した資料の量からもその主張の妥当性には疑問が残るので、さらなるデータを集め考察した後、これまでと同様

の理論的形式化が可能であることを示し、その後、(i)と同じ順序で、その他の動詞に関して分析を行い、各動詞間の文法化プロセスと時期の違いを明らかにし、その理由を意味構造の面から明らかにしていきたい。

(3) (1)の共時的視点と(2)の通時的視点を統合し、文法化に関して、両方面から議論する。

例えば、「行く」「来る」の文法化について共時的分析を示した新井・日高 (2015b)においては、おおまかに言うと、両者を「イベント開始寄りの視点」「イベント終了寄りの視点」を取る動詞として分析しているが、古代語においてもそれがあてはまるとすると、日高 (2015)で示した「行く」と「来る」の文法化プロセスが異なることを説明しにくいように思われる。その解決のためには、少なくとも古代語の「行く」と「来る」の意味的な関係が現代語のそれとは異なることを示す必要があると思われる。もちろん現代語における「行く」「来る」の関係も詳細に再考する必要がある。これらの考察を通して、「行く」「来る」の文法化について、共時・通時両面から矛盾の少ないモデルを提示していく。他の動詞についても、共時的・通時的分析がお互いになるべく矛盾のない形で成立するような理論的モデルを示す。それに付随して、テ形複雑述語と複合動詞の共時的・通時的関係も明らかにしていきたい。

４．研究成果

当初予定していた歴史的考察は十分と言えず、通時的考察と共時的考察を統合するというところまでは到達できなかったが、共時的視点に基づく日本語の複合動詞およびテ形複雑述語に加え、英語についても分析を示し、本研究で想定する理論的枠組みである程度統一的に説明できるという見通しを得たのは成果であったと考える。

具体的には、日本語については、開始付近を表す「V-始める」「V-かける」「V-だす」「V-てくる」、終了付近を表す「V-切る」「V-ぬく」の統語構造と詳細な意味構造の分析を得た。また、動詞ではないが、最近若者を中心に意味や使用が変化しており、そこに慣習的推意が関わっていると考えられる「普通に」についても分析した。英語については、所有を表す have got と give を主動詞とした軽動詞関連構文を分析した。以下で各分析について概略を述べる。

まずイベント終了に関わる統語的複合動詞「V-切る」と、イベント開始に関わる統語的複合動詞「V-かける」についての共時的分析について述べる（後者に関しては、連帯研究者である板東美智子氏（滋賀大学）との共同研究に負うところが大きい）。先行研究では、両者共に「アスペクト複合動詞」として扱われてきたのに対し、本研究では、アスペクト的なものとモダリティ的なものの２つが存在することを主張し、その意味構造と統語構造を明らかにすることに取り組み、次のような分析結果を得た。

これまで「アスペクト」として一義的に扱われてきた「V-切る」「V-かける」にも、アスペクトを表すものとモダリティ的なものの２種類があり、それを区別する意味的な手がかりは、イベントの開始や終了状態に対する「観察可能性」である。具体的には、補部となる動詞句で表されるイベントの開始や終了状態が「観察可能」である場合、「アスペクト」としての特性を持ち、それが「観察不可能」である場合は主観的な判断を表す「モダリティ」としての特性を持つことを主張した。そして「切る」「かける」にそれぞれ２つの語彙登録を仮定し、形式的・構成的な意味合成を行うことにより、先行研究における直観的な多くの分類を単純化・モデル化できること、また、２つの「V-切る」（および「V-かける」）は異なる統語構造を取ることを示した。

「V-てくる」については、「V-ていく」との対照という観点から分析し、アスペクトを表す用法については、「V-て行く」と異なり、再分析（テを含む後半部が形態的に１つになっているということ）が義務的でないものがあること、移動を表す場合も両形式は再分析において非対称的

分布を示すことを明らかにした。これらの研究を通して、これまでは別個に議論されることが多かった「V-テ-V」と V-V 複合動詞も、全て異なるものというわけではなく、V-テ-V の中でも、特に語彙的複合動詞と同様の意味構造を持つと分析できるものは、テが実質的な意味機能を失い、再分析がされやすくなっているという主張を展開した。

さらに、同じくイベント開始付近を表す「V-始める」「V-だす」「V-てくる」の詳細な違いについて分析した。命題的意味のみを持ち、視点が未指定で推意を持たないアスペクト専用の「-始める」が開始を表すための比較的客観的かつディフォルト的アイテムであるのに対し、「V-出す」「V-かける」「V-て来る」では視点や推意の情報が細かく指定されていることを示した。「V-だす」は、「客観的視点から開始時を見る」こと、イベント開始時が観察困難な場合は容認性が落ちることから、上述の「V-かける」と同様「観察可能性」という概念が重要な役割を果たしていることを示した。「V-て来る」の一部の用法については複合動詞と同様の形態統語構造を持つことを示し、話者（の共感焦点）が，変化前後の２点を結びつけて変化を認定すること、開始前からすでに終了時に視座を置くことにより当該イベントの発生を予期するという慣習的推意が生じることを主張した。以上の分析を形式化し、その分析過程で、少なくともこれらにおいて「意図性」をプリミティヴな素性として設ける必要はなく、「視点」の値から間接的に読み込まれること、推意の値は、基体動詞の意味や、命題的意味に対する解釈的意味として導出することを示唆した。この分析については「開始を表す複雑述語と複合動詞–「V-てくる」「V-だす」「V-始める」の対照」と題して『統語構造と語彙の多角的研究–岸本秀樹教授還暦記念論文集–』（于一楽 他（編）、開拓社）に収録された。

「V-ぬく」については、統語構造としては、VP 補文構造と V'補文構造の曖昧性を認める影山 (1993)や V0 補文構造とする由本 (2005)の分析に対して、本研究では、「られ」を使役の意味を表す形態素とする畠山・本田・田中 (2018)を援用し、一律に VP 補文構造を取ることを示した。意味の面では、「ぬく」に対して 2 つの登録を仮定し、形式的・構成的意味合成を提案することにより、先行研究（姫野 (1980, 1999), 森田 (1989)等）における直観的な分類に対して理論的根拠づけを与えつつ再構成し、文法化の側面からもその分類の妥当性を示唆した。また、類似の意味を持つと思われる「V-切る」と「V-ぬく」の意味と統語構造を詳細に比較し、統一的な分析を試みた。両者はそれぞれ２つの意味構造が想定されるが、「-切る」がアスペクト的なものとモダリティ的なもので異なる統語構造を取る一方、「-抜く」はいずれの用法とも本動詞が持っている意図生や制御性をより残しており、別個の統語構造を取らないことを明らかにした。また、このことから、「-ぬく」の方が本動詞に近く、文法化の観点から見ても、完全なアスペクトマーカーとしての用法を持つ「-切る」よりも文法化が進んでいないことが示唆された。

「普通に」については、その意味用法の変化を、「主観的述語に対して客観的（一般的）尺度を用いる」ことによる「主観的述語の客観化」と、「（間）主観化」（Traugott (2003) 等）による慣習的推意（Conventional Implicature; Grice (1975), Potts(2005)）表現である発話態度副詞への拡張、すなわち語彙的（・語用論的）意味の変化として捉えた。具体的には、本来「文の表す命題内容が、社会的に存在する（と話し手が思っている）通念基準に合致していることを述べる」という注釈的「普通に」が、「発話主体の（主観的）通念基準」に合致していること（主観化）や「発話主体自身の聞き手に対する態度が通常通りであること」を表明する（（間）主観化）ように変化してきているとの分析を示した。なお、本論考を修正・発展させた論文を『レキシコンと意味・統語の相互作用』（仮）（岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也 編著、開拓社、2024 年出版予定）に収録予定である。

次に英語に関する分析について述べる。まず、イギリス英語における口語表現とされる所有を

表す have got について考察した。具体的には、先行研究の意味論的説明を批判的に検討し、have got が富岡 (2010) の「主張行為」という発話行為を担うという語用論的説明を与えることで、先行研究では問題となるデータが無理なく説明可能になることを示した。

英語の軽動詞関連構文については、give を主動詞とするものについて、日高 (2007)を発展させた分析を示した。具体的には、「軽動詞構文」として認定できるのは John gave a shout.のような形式のみであることを主張し、Curme (1931)や Jespersen (1954)等の記述的研究が指摘する「一般感覚的意味（popular feeling)」や「無意識的反応」といったものが、補部名詞の意味の多義性や軽動詞となった give の意味構造から導出することを示し、当該軽動詞構文の意味機能が補部名詞の目的役割に登録されている語用論的意味に焦点を当てることであるとした。なお、本論考は『構文形式と語彙情報』（仮）（岸本秀樹・臼杵岳・于一楽 編著、開拓社、2023年出版予定）に収録予定である。

以上が本研究の概要である。全体を通して、本研究は、これまでの語彙意味論ではあまり扱われて来なかった「視点」や、推意、発話行為的意味などの非命題的な意味、およびそれらと命題的意味の関係について、共通の枠組みを用いてある程度統一的に形式化してきた。このことによって、より明示的で反証可能性のある議論を可能にし、レキシコンと統語論、語用論の関係について一定の示唆を与えるものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 日高俊夫	４．巻 25
２．論文標題 統語的複合動詞「V-切る」「V-ぬく」の意味構造と 統語 ： 文法化における比較に向けて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin	６．最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14946/00002318	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日高俊夫、今西真弓	４．巻 5
２．論文標題 所有を表すhave gotについての語用論的分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際・経済論集	６．最初と最後の頁 178-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日高俊夫	４．巻 2
２．論文標題 VテVにおける再分析　―複合動詞との統一的分析に向けての覚え書き―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国際・経済論集	６．最初と最後の頁 17-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日高俊夫	４．巻 37
２．論文標題 統語的複合動詞「V-切る」における意味構造と統語	５．発行年 2017年
３．雑誌名 KLS Proceedings	６．最初と最後の頁 169-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Bando, Michiko and Toshio HIdaka	4．巻 37
2．論文標題 Ambiguous Syntactic V-kake Compounds	5．発行年 2017年
3．雑誌名 KLS Proceedings	6．最初と最後の頁 157-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 日高俊夫	4．巻 21
2．論文標題 Vテイク・Vテクルの多義性と統語	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin: TALKS	6．最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14946/00002020	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 日高俊夫	4．巻 37
2．論文標題 統語的複合動詞「V-切る」における意味構造と統語	5．発行年 2017年
3．雑誌名 KLS Proceedings	6．最初と最後の頁 169-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Bando, Michiko and Toshio Hidaka	4．巻 37
2．論文標題 Ambiguous Syntactic V-kake Compounds	5．発行年 2017年
3．雑誌名 KLS Proceedings	6．最初と最後の頁 157-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 日高俊夫
2．発表標題 「普通においしい」は何が普通なのか？
3．学会等名 日本言語学会第164回大会ワークショップ
4．発表年 2022年

1．発表者名 日高俊夫
2．発表標題 統語的複合動詞「V-ぬく」の意味構造と統語
3．学会等名 日本言語学会第161回大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 Toshio HIDAKA
2．発表標題 The interface of aspect and modality on event edges: a case study of the Japanese subsidiary verbs kake- and kir-
3．学会等名 Japanese Studies Association of Australia　(JSAA)（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 日高俊夫
2．発表標題 複雑述語における命題と推意―開始を表す表現について
3．学会等名 日本言語学会第156回大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 日高俊夫・今西真弓
２．発表標題 所有を表すhave got における発話行為性
３．学会等名 日本言語学会第157回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 日高俊夫
２．発表標題 Vテイク・Vテクルにおける多義性と再分析
３．学会等名 日本言語学会第155回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 日高俊夫
２．発表標題 複雑述語における命題と推意 ― 開始を表す表現について
３．学会等名 日本言語学会第156回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 日高俊夫
２．発表標題 統語的複合動詞「V-切る」における意味構造と統語
３．学会等名 関西言語学会第41回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 板東美智子、日高俊夫
２．発表標題 統語的複合語「V-かける」の二義性について
３．学会等名 関西言語学会第41回大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 于 一楽、江口 清子、木戸 康人、眞野 美穂、日高俊夫 他	４．発行年 2020年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 384
３．書名 統語構造と語彙の多角的研究	

１．著者名 岸本秀樹、臼杵岳、于一楽、日高俊夫　他	４．発行年 2023年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 -
３．書名 構文形式と語彙情報（仮）	

１．著者名 岸本秀樹、日高俊夫、工藤和也 他	４．発行年 2024年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 -
３．書名 レキシコンと意味・統語の相互作用（仮）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関